

中国人日本語学習者による 動作の一時性および重複性を示すオノマトペの理解¹

張 婧禕²

王 蕾³

玉岡 賀津雄⁴

DOI: 10.18999/stul.35.87

要約:本研究は、中国人日本語学習者(N=83)による一時性と重複性の動作を示すオノマトペの理解を検討した。オノマトペの理解テストは12問で構成され、2種類(一時性および重複性)のオノマトペの理解を測定した。また、共起する動詞の種類は、サ変動詞、自動詞および他動詞の3種類からなる。語彙能力テストの得点を用いて、83名の学習者を語彙能力の上位群と下位群の2群に分けた。分類木分析でオノマトペの理解の正誤における背景諸要因を(1)語彙能力(上・下位群)、(2)共起する動詞(サ変動詞、自動詞、他動詞)および(3)オノマトペの種類(一時性および重複性)の3つの説明変数で予測した。その結果、語彙能力が重複性のオノマトペの理解に強く促進した。それに対して、一時性のオノマトペは、共起する動詞の種類が最も強い要因となったが、語彙能力の影響はその次であり、共起する動詞の種類と語彙能力との相互作用がみられた。

キーワード: オノマトペ 一時性と重複性の動き 共起 分類木分析

1. はじめに

日本語では、音や動作をいきいきと描写するためにオノマトペが使われる。それは、話し言葉ばかりでなく、小説や詩などの文学作品においても不可欠な表現である(Imai et al.

¹ English title: Comprehension of temporal and duplicative movement onomatopoeia by native Chinese speakers learning Japanese

² ZHANG, Jingyi, University of Miyazaki, Japan, E-mail: jingyizhang@cc.miyazaki-u.ac.jp

³ WANG, Lei, Donghua University, Shanghai China, E-mail: akizawa@dhu.edu.cn

⁴ TAMAOKA, Katsuo, Hunan University, China; Nagoya University, Japan, E-mail: ktamaoka@gc4.so-net.ne.jp

2008 など)。動作を示すオノマトペは、意味属性から一度限りのものと連続のものに分類される(Imai et al. 2008; 田守・ローレンス 1999; 田守 2002; 中里 2017 など)。本研究では、動作が一回だけのオノマトペを一時性のオノマトペ、連続のオノマトペを重複性のオノマトペと呼ぶ。音韻形態からみると、2モーラの語基である場合、一時性のオノマトペは CVCVQ /CVCVN/CVCVri という音韻構造を持つ。重複性のオノマトペでは、その反復形をとり、CVCV+CVCV という音韻構造を持つ。たとえば、「ぽろっ(と)」は、CVCVQ の音韻構造であり、一時性を示すオノマトペである。「ぽろぽろ」は CVCV+CVCV と反復した音韻構造であり、重複性を示すオノマトペである。

オノマトペは動詞、形容詞、副詞、名詞として使われる。しかし、大多数のオノマトペは、音韻構造にかかわらず、動詞を修飾する様態を表す副詞として使用される(田守ほか 1999)。一般的に、一時性を表すオノマトペは、「急に玉のような涙がぽろっと流れた」のように、文中に「急に」、「一瞬」、「突然」などのような短い時間を示す表現あるいは一回しか行わない意味を示す表現を伴うことが多い。そのため、持続の意味を含む「ぽろぽろ」が瞬間性を意味する「急に」や継続性のない文脈で使われると、文の容認度が落ちる傾向がある。オノマトペにおける一時性と重複性について、田守(2002)は、191 名の日本人大学生を対象に、オノマトペを含んだクローズテストを 10 問行った。各問題における反復形と非反復形のオノマトペの使用人数の違いから、日本語母語話者はオノマトペの一時性と重複性の違いを理解しており、動作の繰り返しまたは継続を区別しながら、使用していることを示した。

人間の五感(聴覚、視覚、臭覚、味覚、触覚)を描写するための日本語のオノマトペは、特定の動詞と強く結びつく傾向があり、サ変動詞の「する」と共起する場合の生産性が最も高い(田守 2002; 玉岡・木山・宮岡 2011)。ただし、「する」と共起する擬態語¹⁾が表す意味は曖昧であり、具体性に欠ける(中北 1991)。黄(2010)は日中両言語のオノマトペ辞書に収録された「オノマトペ+する」の用例(中国語では、オノマトペを述語とした用例)を集計した。そして、「オノマトペ+する」のような述語的な用法については、日本語に比べて中国語では非常に少ないことを報告している。

また、自他動詞の習得に関して、たとえ日本語能力が向上しても、中国人学習者にとって、自動詞・他動詞(以下、自他動詞)の使用に関する習得は難しいと指摘されている(守屋 1994; 中石 2005)。動詞を含む複合名詞の理解においても、中国人日本語学習者には、こうした自他動詞の使用が不明瞭であるため、習得が難しいと報告されている(張・玉岡 2017)。

以上のことから考えても、オノマトペは動詞と強い関係を有するので、自他動詞やその使用に関する知識が十分に習得されていない段階では、オノマトペの意味を正確に理解するのは、難しいのではないかと推測される。さらに、オノマトペに関する表現は日本語教育の現場であまり積極的に取り上げられないようである。これに関して、田嶋(2006)は、上級日本語学習者 15 名にさまざまなオノマトペを使って日本語の文を書いてもらった。その結果、日本語能力が上級レベルでも、使用できるオノマトペの数が限られていることが指摘している。中国語は日本語のようにオノマトペに富んだ言語ではない。そのため、中国人日本語学習者は、日本語のオノマトペをうまく使えないという指摘もある(金 1989; 張 1989)。したがって、Ellis (1997)が語彙習得の方法として示したように、語彙と共起する表現および適切な文脈を同時に学習しなくてはならない。

そこで本研究では、(1)中国人日本語学習者がオノマトペの理解において、日本語母語話者と同様に、一時性と重複性という意味属性を正確に区別できるかどうか、(2)既習の語彙知識およびオノマトペと共起する動詞の種類が、一時性と重複性のオノマトペの理解にどのように影響するか、を検討する。そのために、まず中国人日本語学習者を対象に、オノマトペを含む日本語の語彙テストを実施し、語彙能力を測定する。さらに、分類木分析を用いて、一時性と重複性のオノマトペの理解に対する知識の影響要因を検討する。

2. 調査協力者

中国の上海にある大学で、日本語を学んでいる中国人学習者 83 名を調査協力者とした。女性 62 名、男性 21 名であった。平均年齢は 21 歳 0 カ月、標準偏差は 1 歳 7 カ月であった。最年長は 27 歳 11 カ月で、最年少は 18 歳 3 カ月であった。日本語学習歴の平均は 2 年 8 カ月で、標準偏差は 1 年 6 カ月であった。日本語学習歴は最長が 7 年 4 カ月で、最短が 1 年 3 カ月であった。また、日本での滞在期間の平均は 2 カ月であり、標準偏差は 4 カ月であった。日本での最長滞在期間は 1 年であり、最短滞在時間は 0 カ月(日本での滞在経験なし)であった。本研究では、このような学習者を対象に、オノマトペを含む日本語の語彙能力テストを実施した。また、日本語母語話者 86 名に対しても、12 問のオノマトペ理解テストを行った。日本語母語話者のうち、女性が 31 名で、男性が 55 名であった。彼らの平均年齢は 18 歳 9 カ月であり、標準偏差は 10 カ月であった。

3. 調査内容

本研究では、日本語のオノマトペと一般語彙の理解の問題を1つのテストとして、問題をランダムに配置して実施した

3.1 日本語のオノマトペのテスト

田守ほか(1999)は、2モーラ反復形のオノマトペ(以下は重複性のオノマトペと記す)はより定着した表現であるとしている。そこで本研究は 1998 年から 2015 年までの 18 年分の毎日新聞コーパスを使って、2モーラの語基を持つ 12 語のオノマトペをターゲット語として選択した。このコーパスの形態素の重なり頻度(type frequency)は 663,243 で、記号を除いた延べ頻度(token frequency)は 398,406,147 である。形態素は、MeCab 0.996(工藤・山本・松本 2004)で解析した。ただし、ここでいう形態素は、言語学で定義される「意味上の最小単位」とは異なる。

たとえば、固有名詞の「愛知時計電機」は、「愛知」「時計」「電機」で3語であるが、MeCab では形態素1つとして数えられている。これらの語はオノマトペの属性により、一時性および重複性の2つに分類ができる。さらに、各属性のオノマトペにおいて、共起する典型的な動詞の種類により、サ変動詞、自動詞および他動詞と3つに分けられる。こうして、各属性のオノマトペと共起する動詞の種類に対して、2語を設けて、合計 12 語のオノマトペを選んだ(12 語:一時性・重複性の2種類のオノマトペ×3種類の共起動詞×オノマトペ2語)。これらの語を使って四者択一の形式のオノマトペ理解テストを作成した。12 語のターゲット語および分類の詳細は表1に示した。

表1 選定した 12 語のオノマトペにおける分類の詳細

No.	オノマトペ	属性	共起動詞	動詞種類	No.	オノマトペ	属性	共起動詞	動詞種類
1	うとっと	一時性	する	サ変動詞	7	いらいら	重複性	する	サ変動詞
2	はらっと	一時性	する	サ変動詞	8	くらくら	重複性	する	サ変動詞
3	ぴかっと	一時性	光る	自動詞	9	びゅーびゅー	重複性	吹く	自動詞
4	ぴよんと	一時性	跳び込む	自動詞	10	ぽろぽろ	重複性	流れる	自動詞
5	ちょきっと	一時性	切る	他動詞	11	がりがり	重複性	噛む	他動詞
6	ぼきっと	一時性	折る	他動詞	12	ゆらゆら	重複性	揺らす	他動詞

なお、瞬間性を表す時間名詞で動作を1回しか行わないかまたは繰り返して行われるかを定めるため、刺激文においては、「急に」「突然」などの時間名詞を提示した。たとえば、一時性を測定するテストの問題は、「弟が私の後ろ髪を一束()切った。」という刺激文である。それを完成するために、A「ちよきちよき」、B「ちよきと」、C「かんかん」、D「かんと」の4つの選択肢から正しいものを1つ選ぶ問題である。ここでは、B「ちよきと」が正答である。一方、重複性を測定するテストの問題は、「空港で親と別れた後、涙が()流れて止まらなかった。」という刺激文である。これを完成するために、A「ころころ」、B「ころと」、C「ぼろと」、D「ぼろぼろ」の4つの選択肢から正しいものを1つ選ぶ問題である。ここでは、D「ぼろぼろ」が正答である。一時性と重複性のオノマトペの2つの下位分類について各6問で、1問1点の配点で、12点満点である。

3.2 日本語の語彙テスト

本研究は、宮岡ほか(2011)の語彙テストを使い、日本語の一般語彙(以下は語彙と記す)の能力を測定した。この語彙テストの問題は四者択一の形式で、名詞、動詞、形容詞、機能語の4つの下位分類からなる。各下位分類につき12問である。1問1点であるため、満点は48点となる。テスト問題としては、「彼女はどんなに大変なときでも、()ひとつ言わずに病人の世話をしている。」という文を完成するために、A「語句」、B「苦難」、C「不評」、D「愚痴」の4つの選択肢から正しいものを1つ選ぶ形式である。ここでは、D「愚痴」が正答である。

4. 分析および結果報告

4.1 テストの実施結果および信頼度係数

83名の学習者に実施した日本語の語彙およびオノマトペの理解テストの結果を表2に示した。48問の日本語の語彙テストの得点の平均は32.13点で標準偏差は6.46点であった。48点満点のうち、最高得点は45点で最低得点は20点であった。12点満点の品詞別の各下位分類をみると、形容詞の平均は7.47点で標準偏差は2.13点であった。動詞の平均は8.59点で標準偏差は1.86点であった。名詞の平均は9.52点で標準偏差は1.63点であった。機能語の平均は6.55点で標準偏差は2.16点であった。

表2 学習者による語彙テストにおける各下位分類の平均および信頼度係数

テストおよび下位分類	満点	<i>M</i>	<i>SD</i>	Max	Min	信頼度係数 (α)
日本語の語彙テスト	48	32.13	6.46	45	20	0.85
形容詞	12	7.47	2.13	11	3	
動詞	12	8.59	1.86	12	5	
名詞	12	9.52	1.63	12	5	
機能語	12	6.55	2.16	11	1	
オノマトペの理解テスト	12	5.99	2.19	11	2	
一時性のオノマトペ	6	2.12	1.33	5	0	
重複性のオノマトペ	6	3.87	1.50	6	0	

注: $N=83$. M は平均, SD は標準偏差を示す。

一方, 12 問のオノマトペの理解テストの平均は 5.99 点で標準偏差は 2.19 点であった。オノマトペの各下位分類の得点をみると, 6 点満点のうち, 一時性のオノマトペの平均得点は 2.12 点であり, 標準偏差は 1.33 点となった。それに対して, 重複性のオノマトペの平均得点は 3.87 点で, 標準偏差は 1.50 点であった。また, 今回実施した全 60 問のテストのクロンバックの信頼度係数は高く ($\alpha=0.85$), 内的一貫性が高いテストであると評価される。48 問の語彙テストの平均 ($M=32.13$) を使って, 83 名の学習者を 2 群に分けた。満点 48 点のうち, 33 点以上の 35 名を上位群として, 32 点以下の 48 名を下位群とした。これらの 2 群を 83 名の学習者の語彙能力として, 分類木分析でオノマトペの選択正誤を予測するための 1 つの説明変数(独立変数)とした。

4.2 2種類のオノマトペにおける学習者と日本語母語話者の違いの検討

2種類のオノマトペの理解における上・下位群学習者および日本語母語話者の3群間の違いを分散分析で検証した。表3に示したように, 一時性のオノマトペについて, 86 名の日本語母語話者による平均正答率, 48 名の下位群学習者による平均正答率および 35 名の上位群学習者による平均正答率を使って分散分析を行った。その結果, 主効果が有意であった [$F(2, 166)=62.46, p<.0001$]。シェフェの多重比較で3群間の平均正答率を比較した。一時性のオノマトペについては, 両群の学習者は母語話者(平均正答率=60.08%)よりも有意に理解度が低かった。さらに, 上位群の学習者(平均正答率=46.19%)は下位群の学習者(平均正答率=27.43%)よりも有意に得点が高かった。

表3 2種類のオノマトペにおける母語話者、上位群および下位群学習者の正答率

オノマトペ の種類	正答率(%)			F 値
	母語話者	上位群学習者	下位群学習者	
	N=86	N=35	N=48	
一時性	60.08	46.19	27.43	$F(2,166)=62.46, p<.0001$
重複性	93.02	78.57	54.17	$F(2,166)=76.77, p<.0001$

同様に、重複性のオノマトペについても、86名の母語話者による平均正答率、48名の下位群学習者による平均正答率および35名の上位群学習者による平均正答率を使って分散分析で検証した。その結果、主効果が有意であった[$F(2, 166)=76.77, p<.0001$]。そこで、シェフェの多重比較で3群間の平均正答率を比較した結果、重複性のオノマトペに対して、上位群の学習者も下位群の学習者も母語話者(平均正答率=93.02%)より理解度が低かった。さらに、上位群の学習者(平均正答率=78.47%)は下位群の学習者(平均正答率=54.17%)よりも有意に理解できていた。語彙能力が高くなると、一時性と重複性の両オノマトペの理解も向上することが示された。

4.3 語彙知識による一時性および重複性のオノマトペ理解の予測

日本語の一般語彙の理解における4種類の品詞が、オノマトペの一時性と重複性の理解にどう影響するかを検討するために、ステップワイズ法による重回帰分析を行った。まず、83名の中国人日本語学習者による48問の日本語の語彙テストが持つ4つの下位分類の品詞でオノマトペの一時性を予測した($R^2=0.27$)。

表4 品詞別語彙能力による一時性・重複性のオノマトペの習得予測

説明変数	一時性のオノマトペ ($R^2=0.27$)			重複性のオノマトペ ($R^2=0.22$)		
	偏回帰係数 (β)	t 値	p	偏回帰係数 (β)	t 値	p
	形容詞	0.29	2.27	*	0.32	2.93
動詞	0.30	2.38	*	0.14	0.92	ns
名詞	0.10	0.81	ns	0.02	0.15	ns
機能語	0.19	1.53	ns	0.25	2.25	*

注:*は $p<.05$, **は $p<.01$.

表4に示したように、4つの日本語の品詞のうち、形容詞($\beta=0.29, p<.05$)と動詞($\beta=0.30, p<.05$)がオノマトペの一時性に対して有意な正の予測変数となった。同様に、48問の日本語の語彙テストが持つ下位分類の4種類の品詞で、オノマトペの重複性を予測した($R^2=0.22$)。その結果、一時性のオノマトペとは異なり、4つの日本語の品詞のうち、形容詞($\beta=0.32, p<.01$)と機能語($\beta=0.25, p<.05$)がオノマトペの重複性に対して有意な正の予測変数となった。

以上のように、2つの重回帰分析では、4種類の品詞のうち、動詞、形容詞、機能語のような文の構成と関わる品詞の知識が、学習者による一時性と重複性の2種類のオノマトペの理解を有意に促進したことが示された。これから、学習者による理解における語彙能力、オノマトペの属性および共起動詞の種類相互関係について、分類木分析で検討する。

5. 分類木分析によるオノマトペ選択に影響する諸要因の検証

本研究では、中国人日本語学習者によるオノマトペの理解に影響する諸要因を検討するために分類木分析を用いた。日本語の一般語彙の能力(上位群・下位群)、オノマトペの属性(一時性・重複性)、共起動詞の種類(サ変動詞、自動詞および他動詞)の3つの説明変数(独立変数)で、オノマトペの正誤の目的変数(従属変数)を予測するモデルとした。図1のように、分析の結果は、3層の構造を持つ樹形図になった。

まず、83名の中国人日本語学習者によるオノマトペの選択の正誤に対して、最も強く影響したのはオノマトペの属性であった[$F(1, 994)=92.07, p<.001$]。ルートノード0の「オノマトペの正誤」からオノマトペの選択の正誤によりオノマトペの属性で分岐し、ノード1の「重複性」とノード2の「一時性」に分かれた。学習者による判断の正答率について、重複性のオノマトペ(平均正答率=64.46%)は一時性のオノマトペ(平均正答率=35.30%)より、29.16%も高く、これは有意であった。そのため、中国人日本語学習者にとっては、重複性のオノマトペのほうがより正しく選択されることが示された。重複性のオノマトペに対して、一般語彙の能力は2層目の影響要因となり、ノード1の「重複性」のオノマトペから、ノード3の日本語の語彙能力の「上位群」とノード4の「下位群」で分岐した[$F(1, 496)=33.58, p<.001$]。上位群の日本語学習者による重複性のオノマトペ(平均正答率=78.57%)は下位群(平均正答率=54.17%)より24.40%も高いことから、日本語の一般語彙の能力は重複性のオノマトペの選択の正誤判断へ促進的に影響することがわかる。

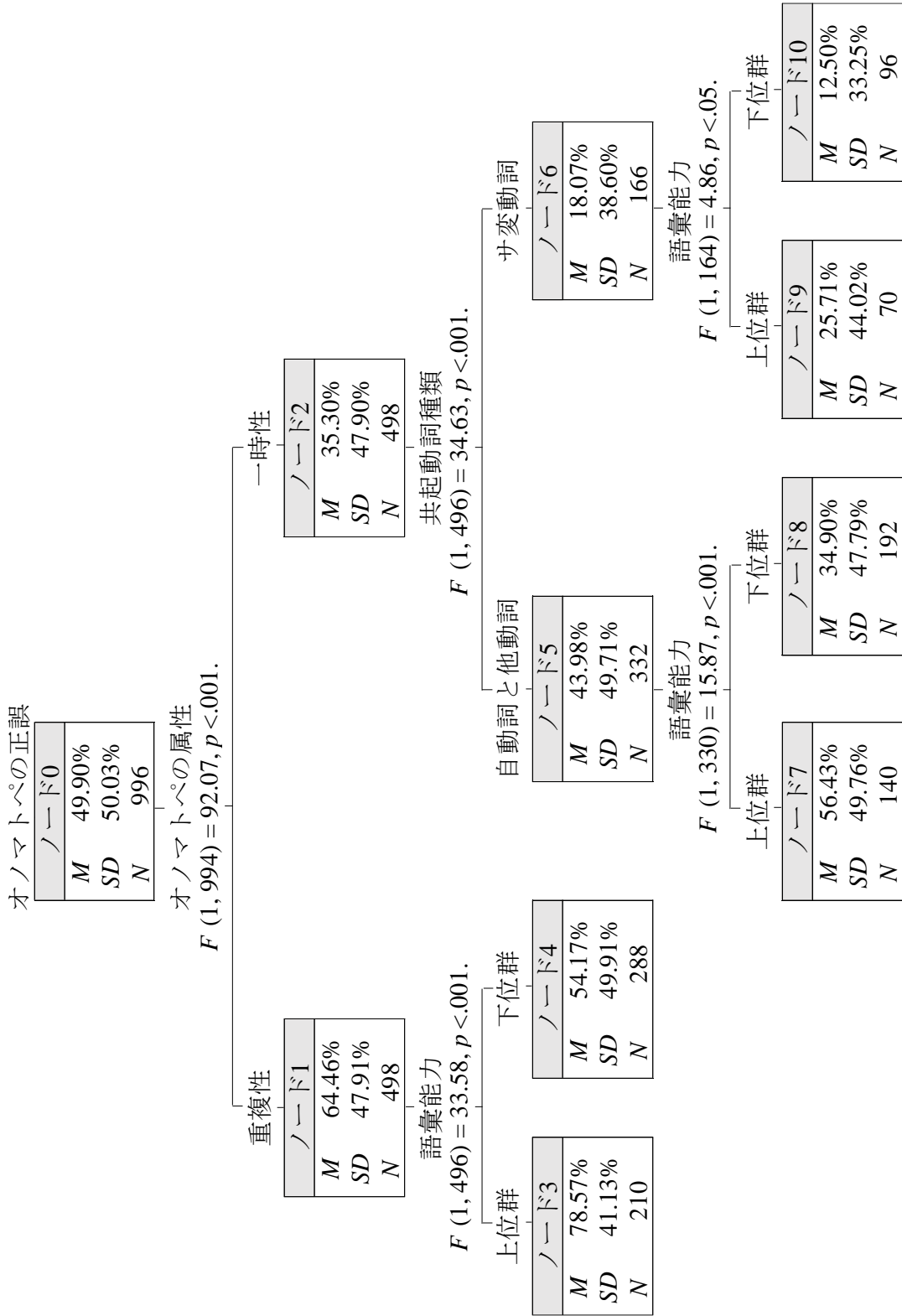


図1 分類木分析によるオノマトペの正誤における背景諸要因

注：%は正答率である。なお、Mは平均、SDは標準偏差、Nは全回答頻度である。

一方、一時性のオノマトペでは、2層目の影響要因はオノマトペと共起する動詞の種類であった[$F(1, 496)=34.63, p<.001$]。ノード2の「一時性」のオノマトペから、ノード5の「自動詞と他動詞」とノード6の「サ変動詞」に枝が分かれた。3種類の共起動詞のうち、自動詞と他動詞を伴う一時性のオノマトペ(平均正答率=43.98%)はサ変動詞(平均正答率=18.07%)よりも正答率が 25.91%高かった。一時性と共起する動詞の種類の次に、語彙能力が3層目の影響要因となった。いずれも、ノード7とノード9の日本語の語彙能力の「上位群」の日本語学習者はノード8とノード 10 の「下位群」の日本語学習者より一時性のオノマトペの選択の正答率が高かったので、日本語の一般語彙知識は一時性のオノマトペの正誤判断も促進する傾向があるといえよう。

6. 総合考察

6.1 一時性と重複性のオノマトペ理解の諸要因

本研究では、オノマトペを含む 60 問の日本語の語彙テストを実施し、83 名の中国人日本語学習者による一時性および重複性のオノマトペの理解の背景要因を検討した。その際、統制群として 86 名の日本語母語話者に対しても、12 問からなるオノマトペ理解テストを実施した。そして、語彙能力によって分けた上位・下位群の学習者および日本語母語話者による各オノマトペの意味属性における理解の違いを検証した。さらに、オノマトペの意味属性、共起する3種類の動詞(自動詞, 他動詞, サ変動詞), 一般語彙知識の3つの説明変数で、中国人日本語学習者によるオノマトペの正誤を予測する分類木分析を行った。その結果は、以下の3点に要約される。

第1に、一時性と重複性という2種類のオノマトペの理解における3つのグループ(日本語母語話者, 日本語の語彙能力で分けた上位群および下位群の中国人日本語学習者)の違いが有意であった。それぞれの種類のオノマトペの理解について、日本語母語話者と比べ、日本語学習者は劣っていた。一方、日本語学習者では、語彙能力が一時性と重複性の2種類のオノマトペの理解を促進し、上位群の学習者は下位群の学習者より豊富な語彙知識を持っており、オノマトペもより良く理解できたことがわかった。また、中国人日本語学習者には、一時性と重複性のオノマトペの使い分けの正答率に違いがみられた。具体的には、重複性のオノマトペは共起する動詞の種類にかかわらず、一時性のオノマトペよりも習得が進んでいた。

第2に、語彙理解テストで測定した4つの品詞のうち、形容詞の知識のみが動作の一時性や重複性を問わず、オノマトペを正しく理解するのに寄与した。また、共起する動詞の知識が一時性のオノマトペの理解を促進し、「～ではあるまいし」や「～を皮切りに」などのような統語的な関係を示し形態素的变化を持たない機能語の知識が重複性のオノマトペの理解を促進した。韓国人日本語学習者を対象とした玉岡ほか(2011)の研究では、オノマトペを一時性と重複性という意味属性によって分けてはいないが、共起する動詞および修飾語としての形容詞がオノマトペに先行して習得されるモデルを提案した。

中国人日本語学習者を対象とした本研究は、動詞と形容詞の知識が一時性のオノマトペの理解を促進し、機能語と形容詞の知識が重複性のオノマトペの理解を促進したという結果を得ており、玉岡ほか(2011)と類似した因果関係がみられた。さらに、本研究で得られた結果は、オノマトペの2種類の意味属性によって習得の順序や難易度に違いがあることを示した。今後、オノマトペの特性を考慮した詳細な検討が必要であろう。

第3に、分類木分析によって、オノマトペの理解における影響要因を検討したが、意味属性がオノマトペの選択に最も強く影響した。そして、重複性のオノマトペのほうが容易に理解できることが示された。つまり、学習者の語彙能力は重複性のオノマトペの理解に強く影響する要因であった。日本語の語彙能力の向上と共に、オノマトペが習得しやすくなり、より良く理解できるようになるようである。形容詞の知識の影響についてはすでに述べたが、文法的な役割を果たす機能語に関する語彙知識も重複性のオノマトペの理解に対して、大きな助けになることが示された。

一方、一時性のオノマトペの理解は、重複性のオノマトペの理解における要因構造とは異なり、学習者の一般語彙の知識は重要な要因ではなく、より複雑な構造を示した。共起する動詞の知識が、一時性のオノマトペの理解にとって重要な要因であった。これは重回帰分析の結果と同じであった。つまり、形容詞の知識の影響はもちろんみられたが、語順を理解する際に、オノマトペが修飾する動詞の知識も、オノマトペの理解に大きく貢献していた。学習者による選択からみると、共起動詞がサ変動詞「する」の場合、誤って重複性のオノマトペを選ぶ傾向がみられた。菅原・浜野(2013)は Kakehi, Tamori & Schourup²⁾(1996)に収録された 300 語の日本語の「オノマトペ+する」を集計し、「ぶらぶらする」のような「2モーラの重複性のオノマトペ+する」の生産性が最も高く、優勢であることを報告している。今回の調査対象であった中国人日本語学習者および日本語母語話者は、共に重複形のオノマトペを好んで選ぶ傾向がみられ、菅原・浜野(2013)の集計した結果を支持した。

6.2 オノマトペとサ変動詞「する」の理解

本研究の調査結果によると、中国人日本語学習者は、特に一時性のオノマトペとサ変動詞「する」が構成する共起表現に対する正答率が極めて低かった。金田一(1978)が日本語のオノマトペの表す意味に基づいて、「擬声語」「擬音語」「擬態語」「擬容語」「擬情語」と5つに分類しているように、日本語のオノマトペは、音の模倣(擬声語)ばかりではなく、有生・無生物の動きの様態、心理状態なども表現できる。本研究で問題に使用した6つの一時性のオノマトペのうち、「ぼきっと」「ちよきっと」「ぴかっと」「ぴよんと」は具体的な動詞と共起し、動作の様態を描写するのに対して、「うとっと」と「はらっと」はサ変動詞の「する」と共起し、心理的状态を描写する。「うとっと」と「はらっと」のようなオノマトペは擬情語と呼ばれる(psychological sound-symbolic words あるいは psych-mimetics, Akita 2010; 金田一 1978)。動作の様態を描写する擬態語は視覚的に知覚できるが、心理状態を表す擬情語は経験的に知覚することになる(Akita 2010; Connelly et al. 2016)。幼児を対象とした Imai et al. (2008)の研究では、動作と結びつけて、オノマトペの習得が容易になることを検証している。ただし、あくまで「握る」、「跳び込む」などのような具体的な動詞と結びつけることができるオノマトペに限られる。また、中北(1991)では、幼児期の共感体験を通して得られるような擬情語はサ変動詞「する」と結びつけて表現される傾向があり、もともとサ変動詞「する」によって動詞化される擬態語の意味よりも曖昧であると指摘している。そのため、「擬情語+する」の場合は、日本語学習者にとって、より理解し難くなるようである。さらに、日本語の一時性と重複性のオノマトペのうち、「重複性のオノマトペ+する」の生産性は高い(菅原ほか 2010)ものの、中国語では日本語の「オノマトペ+する」のようにオノマトペを述語とした用法は極めて少ない(黄 2010)。これらの先行研究を通して、擬情語、特に一時性の擬情語は他の具体的な動詞と共起するオノマトペより、サ変動詞の「する」を用いて動詞化されたオノマトペのほうが、日本語学習者にとって理解が極めて難しくなるようである。これは、「する」が特定の意味を持たず、オノマトペのみから意味を推測しなくてはならないからだろうと思われる。そこで、効果的な習得のために、「一時性の擬情語+する」の共起表現は、「他の種類のオノマトペ+具体的な動詞」の共起表現と区別して教えるのがよいであろう。

以上のように、本研究は、83名の中国人日本語学習者を対象にオノマトペの意味属性の理解を考察し、一時性と重複性のオノマトペの理解に影響する諸要因が異なることを示した。こうしたオノマトペの微妙な意味的な違いが中国人日本語学習者の日本語習得に影響することが示された。オノマトペを同じ語種として同一のものとして指導するのではなく、意味

属性の違いによって、異なった指導を展開する必要性があろう。

注

1) 「オノマトペ+する」は、意味・機能からオノマトペの動詞化とされ、1つの述語と考えられる(影山 2005;黄 2011;中北 1991 など)。しかし、本研究は形態的な観点から、「オノマトペ+する」を「オノマトペ+サ変動詞」として考えて調査した。

2) Kakehi, Hisao., Ikuhiro, T. & Lawrence, S. (1996). *Dictionary of Iconic Expressions in Japanese, 2 vols.* Mouton de Gruyter.

謝辞

本研究は、科学研究費補助金・若手研究「日本人学習者の中国語の声調および韻律の理解を促進する背景諸要因」(課題番号:21K13055, 研究代表者:宮崎大学・講師 張婧禕), (中国上海)東華大学文系プレリサーチ一般プログラム「A study of international brand names based on a comparison between China and Japan(中日比較に基づいた国際ブランド名の研究)」(研究課題番号:114-10-0108016, 研究代表者:東華大学・副教授 王蕾)および科学研究費補助金・基盤研究(S)「OS 言語からみた「言語の語順」と「思考の順序」に関するフィールド言語心理学的研究」(研究課題番号:19H05589, 研究代表者:東北大学・教授 小泉政利)の助成を受けた。

[参考文献]

影山太郎(2005)「擬態語動詞の語彙概念構造」『第2回中日理論言語学研究会』ハンドアウト, 1-9.

黄慧(2010)「日中オノマトペの述語用法の諸特徴に関する対照研究—辞書の用例を用いた予備調査—」『思言：東京外国語大学記述言語学論集』6, 3-24.

黄慧(2011)「現代日本語におけるオノマトペの「スル動詞化」について—現代日本語書き言葉均衡コーパス BCCWJ を用いた調査を基に—」『言語・地域文化研究』17, 77-94.

黄慧(2016)「オノマトペの副詞的用法に関する考察：大規模書き言葉均衡コーパスを用いて」『日本語／日本語教育研究』7, 59-74.

金田一春彦(1978)「擬音語・擬態語概説」浅野鶴子(編)『擬音語・擬態語辞典』, 角川書店.

- 金慕箴(1989)「中国における日本語の擬音語・擬態語の教育について」『日本語教育』 68, 83-98.
- 工藤拓・山本薫・松本裕治(2004)「Conditional Random Fields を用いた日本語形態素析」『情報処理学会研究報告 自然言語処理(NL161)』 47, 89-96.
- 菅原崇・浜野祥子(2013)「コーパスに基づく日本語擬態語動詞の意味分析」『第4回コーパス日本語学ワークショップ予稿集』 19-26.
- 田嶋香織(2006)「オノマトペ(擬音語擬態語)について」『関西外国語大学留学生別科日本語教育論集』 16, 193-205.
- 田守育啓・ローレンス スコウラップ(1999)柴谷方良・西光義弘・影山太郎(編)『日英語対照研究シリーズ(6)オノマトペ—形態と意味—』 東京: くろしお出版.
- 田守育啓(2002)『オノマトペ 擬音・擬態語をたのしむ』 東京: 岩波書店.
- 玉岡賀津雄・木山幸子・宮岡弥生(2011)「新聞と小説のコーパスにおけるオノマトペと動詞の共起パターン」『言語研究』 139, 57-84.
- 玉岡賀津雄・宮岡弥生・金秀眞・林炫情(2011)「韓国語を母語とする日本語学習者の語彙知識がオノマトペの習得に与える影響」『言語教育評価研究』 2, 36-41.
- 張麗群(1989)「中国人学習者から見た日本語の擬音語と擬態語」『日本語教育』68, 128-130.
- 張婧禕・玉岡賀津雄(2017)「中国人日本語学習者による NV 型複合名詞の理解」『小出記念日本語教育研究会論文集』 25, 35-50.
- 宮岡弥生・玉岡賀津雄・酒井弘(2011)「日本語語彙テストの開発と信頼性—中国語を母語とする日本語学習者のデータによるテスト評価—」『広島経済大学研究論集』 34(1), 1-18.
- 守屋三千代(1994)「日本語の自動詞・他動詞の選択条件—習得状況の分析を参考に—」『講座日本語教育』 29, 151-165.
- 中石ゆうこ(2005)「日本語学習者による対のある自他動詞の使用の不均衡性—OPI データの分析を通して—」『日本教科教育学会誌』 28(1), 59-68.
- 中北美千子(1991)「擬音語・擬態語と形式動詞『する』の結合について」『国文目白』 31, 247-256.
- Akita, K. (2010). An embodied semantic analysis of psychological mimetics in Japanese. *Linguistics: An Interdisciplinary Journal of the Language Sciences*, 48(6), 1195-1220.
- Connelly, P., Minai, U. & Gabriele, A. (2016). Comprehension of mimetics by adult native speakers of Japanese. *Kansas Working Papers in Linguistics*, 37, 23-41.

Ellis, N. C. (1997). Vocabulary acquisition: Word structure, collocation, grammar, and meaning.
In McCarthy, M. & Schmidt, N. (Eds.), *Vocabulary: description, acquisition and pedagogy*
(pp. 122-139). Cambridge: Cambridge University Press.

Imai, M., Kita, S., Nagumo, M. & Okada, H. (2008). Sound symbolism facilitates early verb
learning. *Cognition*, 109, 54-65.

.....

張 婧禕

(宮崎大学多言語多文化教育研究センター・講師)

Email: jingyizhang@cc.miyazaki-u.ac.jp

王 蕾

(東華大学外国語学院・副教授)

E-mail: akizawa@dhu.edu.cn

玉岡 賀津雄

(湖南大学外国語学院・教授, 名古屋大学大学院人文学研究科・名誉教授)

Email: ktamaoka@gc4.so-net.ne.jp

Comprehension of temporal and duplicative movement onomatopoeia
by native Chinese speakers learning Japanese

ZHANG, Jingyi

(Lecturer, Center for Language and Cultural Studies, University of Miyazaki, Japan)

Email: jingyizhang@cc.miyazaki-u.ac.jp

WANG, Lei

(Associate Professor, Donghua University, Shanghai China)

Email: akizawa@dhu.edu.cn

TAMAOKA, Katsuo

(Professor, Hunan University, China; Emeritus Professor, Nagoya University, Japan)

Email: ktamaoka@gc4.so-net.ne.jp

Abstract: The present study investigated the comprehension of temporal and duplicative movement onomatopoeia by native Chinese speakers learning Japanese (N=83). The onomatopoeia comprehension test consists of 12 questions divided into two types of onomatopoeia, temporality and duplicative movements, and three types of co-occurrence verb (suru-verb, transitive verb and intransitive verb). Based on a Japanese lexical knowledge test, 83 learners were divided into two groups of a lower/higher lexical knowledge. A classification tree analysis was utilized to predict the accuracy of onomatopoeia understanding according to three independent variables, (1) lower higher lexical knowledge groups, (2) three types of co-occurrence verb, and (3) two kinds of onomatopoeia. The result indicated that lexical knowledge significantly contributed to understanding of duplicative movement onomatopoeia whereas comprehension of temporal movement onomatopoeia varied depending on the type of co-occurrence verb. Differing from duplicative movement onomatopoeia, temporal movement onomatopoeia showed interaction of the types of co-occurrence verbs and learners' lexical knowledge.

Keyword: onomatopoeia, temporal duplicative movements, co-occurrence,
classification tree analysis